

この先にどんなな桜が咲こうとままであるわたくしやこの木で苦労する散るもの散らぬも主の胸

新橋芸者だった初代井手ひろ五十九歳の折の小唄である。とうに桜は散り目に青葉の時候になつてしまつたがこの春この唄をあちこちの会でつぶやくようになり始めた。私も作者の歳近くになりようやく「ままよー」の心境になつたからどうか?唄はその時の心象風景でさざまなかたの心となり過ぎ去ったことがふと蘇ることがある。私の今年はパリから始まり新年的挨拶もそこそこに二日の夕暮れはパリに向かう列車にいた。ほんやりかすむ街の灯りを眺めながら八九年会館のパリを思い出す。日仏画館のokejirashiro落し「地団舞公演」の地方を務める過度のプレッシャヤで急性胃炎になつてしまつた数時間後に迫つた開演の為やむなく即効性があるからといきなり「ぶすり!」と太い注射されたりになつてしまつたことや公演後の夢のよくな拍手喝采され色々のシーンが浮かんでは消えてゆき旅情は次第に搔き立てられてゆく。今回も踊家古澤脩峯さんとセーヌ川沿岸に佇む天理大仏文化協会での公演のみだつたのでひたすら地下鉄を乗り継ぎ町のすみずみまでよく

この先にどんな…

たより  
『美紗の会』  
ニューリ

第50号

発行者  
「美紗の会」  
☎03-3441-2726  
編集責任者  
太久保 朋子

四月半ばに東欧へ旅をした。最初の地チエコではスマタナ迎えると言われブルタブ川にかかるカレル橋ではあちこちでストリートミュージシャンの陽気な音が光と風に踊つていた。モーツアルト生誕の地ザルツブルクではサウンドオオブルミュージックの舞台となつたミラベル宮殿のホールで弦楽三重奏を聴いた。ウイーンの王位礼拝堂ではウイーン少年

たのた。まさにこの先に：の唄のよ  
うに私が必ず糸を張り音を蘇  
らせるのことを誓ひがけない  
い出逢いのあつた今回のパリ  
も心に残る旅だつた。

先日テレビでヨーヨー率  
いる「シルクロードアンサン  
ブル」のドキュメント番組を  
観た。彼はその目的を「歴史  
的背景を踏まえ西洋と東洋の  
融合を目指す旅の中で世界の  
人々と交流し得た知識、経験  
を音楽に表現し伝統を未来へ  
拓げてゆきたい」と夢見る。  
まなざして熱く語っていた。  
仲間のアゼルバイジャンの歌  
手は「真心を込めて歌うこと  
ができる人は神から選ばれた  
人。そんな思いで歌つてゐる  
と自己を超越し心の内面に瞬  
りなく集中してゆき、歌の世界  
に音楽は生まれてくる。だから  
人間は善良になるし優しくもなり戦争など起らなくなるよ」と。音楽家達の言葉  
のひとつひとつに私は頷き共  
感した。

「暗い日曜日」のメロディーが今でもこの地に流れているのかしら……と思わずにはいられないほど音楽は人間でいつ歴史に影響を及ぼすものなのだ。

ブダペストは音楽にまつわる思い出の地であつたのでござら去りがたかった。帰る道にホテルから飛行場への道すがら又ドナウ川を渡つたが橋から誰かが身投げしたのでひどく渋滞しているとの知らせがあつた。

ていたハンガリーはハプスブルグ家の統治で全盛を極め川をはさんだブダとペストが一七八二年に二つに現在に至つた。数奇な運命により未だ繁栄の歴史を持ちながるも憂いを含んだ風情がブダペストの魅力になつてゐる。ここでもドナウ川周辺を中心ひたすら歩いたが私の頭の中に「暗い曜日」のメロディーがアンドレレスに流れいた。一九三三年にアーベストのレストランのピアニストが作曲したこの曲は後に映画化されたちまた世界中でヒットすることになる。

当時のヒットラーによるユダヤ人迫害の暗い世相の中で交錯した恋愛を描いてゐるが、やりきれないほどの哀愁が漂う美しい音律は多くの人々を自殺に追い込み身投げ。も後をたたかつた。ハングリーハンガリーハン、ニューヨーク、ローマなどにも同様の現象が起りヨーロッパでは放送禁止にまでなった。日本でも幕末に哀切極まる豊後節がそれを禁じ中が多作者の都路豊後掾は追ひ詰めた。幕府がそれを禁止したが原因の都路豊後掾は追ひ詰めた。

六時の開演時間が会場の広間に移ると、着物姿でいかにも邦楽好きと見えるが婦人達は満員となつた。宿の主人は社長の司会で西松布咏の当地における三回目の演奏会であることに簡単な略歴の紹介の後、師匠は自ら曲の解説を交えながら約十曲をやれられた。感嘆喚衆からも、めでため息の中に似た声が聞こえる。師匠は日本一だらう！」と

去る一月二十三日(土)新潟の岩室温泉「高志の宿」新島屋の独立演会「江戸の粹」が開催された。東京から美紗の会長・マネージャー他十名が参画した。近い応援団が参加した。「トンネルを抜けると雪国であつた」と云ふ川端康成の描写の通り上越新幹線で成った。岩室温泉では殆ど見られない。なんでも佐渡ヶ島と暖流のせいでの地域は温暖なのだそうだ。

宿の女将たちに出迎えられ、二階の部屋に通されたが私は同室の百瀬、河内、佐野の各庄屋敷を本館に改装した高島屋の併ましいがすつかり気に入ってしまった。二十年程前に出張した折、小ぶりの古いホテルで泊まつたが、それのが古き良き風情を心地よく思ふ。それが調和した居心地の良いホテルであり、感心したことを思ふ。

の弟さんは文楽の三味線方として活躍なさつたとのことで、立派な見台があつた。この後、ワイナリ寺へ登堂で昼食をとり、妙光寺と言う寺を訪ねたので、此處の住職小川英爾師も師匠としての知人だそうで、住職になつた後この寺の再建の苦労話を伺い僧侶としての人柄もさることながら、寺の管理者としての経営の才に頭の下がる思いがした。この人と知り合めてから、有意義でもあります。でも、今回の私は極めて思つてゐる。

泣いた。この夜は最後に咽れた中で、一一番良かつたように思われた。『雪』が今までに聞いた公演後、それぞれグループに分かれて食会となつたが、わかれ美紗の会とファンの会と井原の会と、井原の高い部屋で、新潟の温泉の美紗を酌み交しながら、中身を楽しんだ。わいながら談笑し楽しんだ。翌二十四日（日）の朝食は明治天皇駕籠の處」と書いた。ご飯を頂いたが、私は掛け付けの書は「陸軍大将本郷房太輔の書」と書いてあるので、もしやわが遠い親戚かと思いつた。朝食後宿の近くにある師匠の友人で、雲家米沢隆一氏の工房を見学し、いつたん旅館に帰つて、チェックアウトした後、社長の子息が運転する旅館のミニバスで、今度は内側の上原酒造を見学し、ここで酒を試飲した上、お土産に一本もらつたりして、左党の百瀬さんなどは誠に嬉しそうで、

## 「新潟・岩室温泉の思い出」

本鄉公基

なかつた。この先に：のゆか  
ら身投げ事件にまで話は飛く。  
でしまつたがどうやら私の人生は  
唄と共に果てしなく続いてゆきそうだ。

この先にどんな桜が咲きマ  
散つてゆくのだろうか：  
でもまよ：もう私はこの  
木で苦労すると決めたのだか  
ら。

しかし話が一九八四年、バチカン王国ビットエイ宮殿内カバニハルドフオの法王ヨハネ・パンドウロの謁見シーンから始められる。とその語に引き込まれれる。

「中世のお貴様のよつな制服の警官に導かれて来られた法王様は、肘掛けに乗せた手元を交えて話されました。慈愛満ちたお話を聞けば、いかに温かみと優しさがあり、何とも言えないオーラを感じました。法王様は、私は日本で永い旅をしたような気がしません。総ての平和はお互いの国と人々の違いを知ることから始まるのです」と穏やかに話されました。

話は、八六年レスカフ島での文化芸術祭典、八七年世界民族舞踊フェスティバル、八七年パリ公演と東欧、東洋各國、米国、欧洲などの活動を経て最後は参加年アテネオリンピック開催地で

桃定刻に現れたのは、萌黄色を配した美しさ。席に着いた彼女は、「今日は桃の節句に相応しいのです」と切り出します。聴衆からはどよめきと大きな拍手。三井ボランティアの中心事業は、国際留学生への支援を担当する一木会があるのですが、四年度からここで広く国際活動に尽力してきた人々の話をお聴き、「講演会を催す」とになつたのです。そしてこの日、日本伝統芸能を通じて、国際親善を相互理解に努めてきた地唄西松布咏師に話を聴きました。西松布咏師に話を聴くと、異色の催しになつたものだ。企業で毎年国際親善協力団体に貢献している猛者共も、何時もが、と違う業者の出現には少し戸惑った様子。

三月三日、商船三井十五階  
ホテルで三井ボランティア  
ネットワーク事業団（三井ボ  
ランティア）の講演会が開か  
れた。

三治・高橋剛板・野重西正・佐久間俊輔・大木直樹・浜本敏孝・日本基・荻原典一・諸氏などが、その後高橋公基の手で、美紗会を組織し、会報を発行するまでになつた。会は本郷公基に由来するが、公基は三十名の美紗会員を「地唄師」(門の会)の会長を勤めていた。この会は西流を継承した後、今も本伝承の中心に力を注ぐ。

の公演で締めくくられた。多彩な活動の紹介で、伝統芸能を通じて日本の文化と芸術を世界に伝えようとする熱い思いを感じた。

【西松布咏】 师のこと

斎藤高康

は、「遊里で開花した伝統芸能は、苦界に身を洗めなわけねばいけない」といふのが、その一面剝きを楽しむうもと、その他の裏面を嘗めたりする。それが、そのうえ陽気なボップ調の唄もある。そこには日本人の心の二重性が見えて奥の深さを感じます。男はなかなか本音を言えない立場にある

学師が公演をした国。都市、大ガリ、スペイン、タイなどは枚挙に暇した。都、市、大お座敷芸と云ふ言がわねる日本の庶民伝統芸能は、遊里での男少女の仲を唄つたものが多いで、主に春禁和三十一年（五八）年、花街が廃止されで久しい。遊里で発達し、世た伝統庶民芸能を現代の若い代に理解させようとしても難いのはない。ましても生き方の異なる西欧文解明で育つた人たちはこれを理業ではよいとするのが至難の事である。かとすると、師に聞いたこの

解説を招き、学生の日本芸能理論が以前ハーバード大学でも教えたことがあったが、一貫して布咏師と協力した。ソルジャーの日本伝統芸能研究会は、この頃、日本現代詩の研究紹介には力を注いでいる。九七年にはコロンビア大学でドナルド・キーン賞を受賞している。この頃布咏師が公演或いはワクシクショウ師を開いたのは前述の他オレゴン州セントラムニユーヨーク市マンハッタンタウンホールレジ、ワイルメハツトアカレルジ、インディアナ大学イェール大学などであるが、ユニーク大学での公演には、ユニーク氏が在住の松柏会員高橋ヨークが、アボポツダム市シユロス劇場ケルン市、サールのオペラ劇場ラングドン市、イタリー、デンマーク、ハン

活動を全面的に支援したのは、同志社大学創設者新島襄が米国に渡航した際、勉学しがて同州で有名なマサチューセッツアーバンスト大学で日本文学を教えていた源氏物語の研究者ジョン・ソルト助教授である。彼は布咏の芸能と日本伝統芸能との識見に惚れ、アマースト大学の日本伝統芸能研究ワーレクションズップの指導者として布咏

終始一貫布咏師活躍の陰に、いつまでも本郷公基君を始め門弟達は何時か布咏師が評価を得る事を信じてゐる。

師匠の「シルクソウル」、素処のライブ。開演は三回目となりました。開演はぎりぎりで入場したお客様が増えるのは、常連が増えた証拠です。(表処)のおかみ喜代子さんの挨拶のあと、まさに時節の畠で「山谷の小舟」が、山谷堀から日本堤へ土手までを過ぎて吉原へ浮かれた足取りの男。粹というよりは可愛らしい。喜怒哀楽に素直な男といふのは、なんとも愛いらしい風情があります。

二曲目は「春風さんや」。里を春風に、女を桜に見立てて、「主の情けで咲いたじやないか」と言ふ可笑い女の愚痴。繰く三曲目「この先には」この先にどんな桜が咲くことを心にどんとまよ、私やこの木で苦労すまよ」と、これまで女の愚痴

三月二十五日。桜だよりも  
未だ冷た、唄ではながら風も  
んが「手拭いでしのぎたくな  
る」ような夕暮れどき。すつ  
かりお馴染みとなつた、布吹

月生弥爾ウソクルクルシ

川崎 隆章

神宮の宮司様が作らるといふ。明治半ばに、現在の恋の唄「有明」。たゞ、風情は憧憬の対象となります。そしてやはり、恋に名残を求めるのは男なのであります。うか。

七曲目「にごりえ」と八曲目「籠つるべ」はいずれも恋の物語なれば、どちらも惚れた男の悲哀ですが、どになつていいや主張する。やあ、男こそ愚痴をこぼしたくなる者なのでしょうか。

九曲目「夜桜」。途中よつと浮かれて直し、「夜桜」に見立てた花魁を追いかけて男が千鳥島へはります。爰に、容姿に關係なく。

こんな愚痴を言わせざるようになつたら男冥の申し起さうが、サテ實際はどうかといえば春風は女となり、女に男誘う春風は女となり、女に男最が忠誠のことを誓つたのか昔から実はそれがつたのか。四曲目。お馴染みの端唄「花戸は上野」。伊予節を読み込んだ江戸の名前には全国からいろいろな神様が集まつてあります。神名を詠み込んでいた頃はまだ日本文化は太胆い國です。江戸といふ文化は太胆い國です。

自炉。古今集からとつた詞で、  
自ら師と仰ぐ人の追慕の曲。  
布咏、師匠は演奏前に「布咏」と想ひ、  
しも文一師匠のことを想ひながら、  
「師匠の香りを継承してゆきたい」と想ひます」と語

編集後記

七月十五日(金)六時半～八時半  
赤東煉瓦文化化サロン・江戸から  
朱采安へ  
田中優子先生と西松布咏による  
対談  
「一三三味線の本当の魅力」  
九月山鶴仙六日(木)七時半～八時半  
玄関へ  
山能楽研究所  
西松布咏・古澤佑肇  
ゲ唄と舞の会  
お話を川野裕一・中村明一  
第一回美紗(木)の会記念演奏会  
六月一日(火)午後二時半  
高輪区民ホール  
テルル八い時半  
品川会場  
おいで祝宴  
品川プリンス

<http://www.e-soko.com/>

大久保